

## 新宿区立大久保図書館主催の「絵本を届ける運動」に参加しました。

これは、シャンティ国際ボランティア会が取り組んでいる「絵本を届ける運動」に、大久保図書館が賛同して、毎年企画しているものです。9月7日（日）の午後、新宿区大久保地域センターの会議室を使用して行われました。

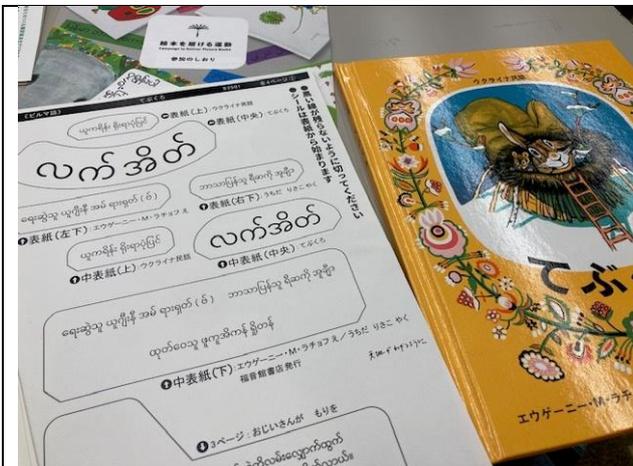
「絵本を届ける運動」の参加のしおりによると、世界には、読み書きができない人が7億 7300 万人おり、紛争、災害、貧困などが原因で学校に通えない子どもたちに学ぶ機会を提供するために、絵本が不足している地域に、日本から翻訳絵本を届けているとのことでした。

今回、私は、この翻訳絵本作りに参加しました。シャンティ国際ボランティア会の活動地域は、カンボジア、ミャンマー、タイ、ラオス、ネパール、アフガニスタンで、今回は、クメール語（主にカンボジア）、ラオス語（ラオス、タイ東北部）、ビルマ語（ミャンマー）、カレン語（ミャンマー、タイ北部）の言葉に翻訳します。と、いっても、参加者が翻訳できませんので、絵本に書いてある日本語の上に、送り先の言語に翻訳されたシールを貼ることで完成させます。翻訳は、まず、日本語を英語に訳して、英語から、現地の言葉に再翻訳するとのことでした。

作業に入る前に、現地の様子のお話があり、この活動が、どのように繋がるのか、理解して始まります。シールを貼る中で、同じ「まげて」という言葉なのに、今のページと次のページで表現されている文字が異なっていて、奥が深いのだろうなと感じ、構造的に文字を見ることに、関心を覚えました。

翻訳（シール貼り）を終えると、最後のページに、シールを貼った人の名前をひらがなと現地の文字で記します。一気に、この文字との距離が近くなります。ラオス語の〇がついている文字は、丸から書き始めると流れるような綺麗なラインで、スイスイかけて、なんか気持ちがいいです。ビルマ語は、講師の先生によると、丸をうまく書くことが基本なようで、子供たちは、一生懸命練習するとのことでした。

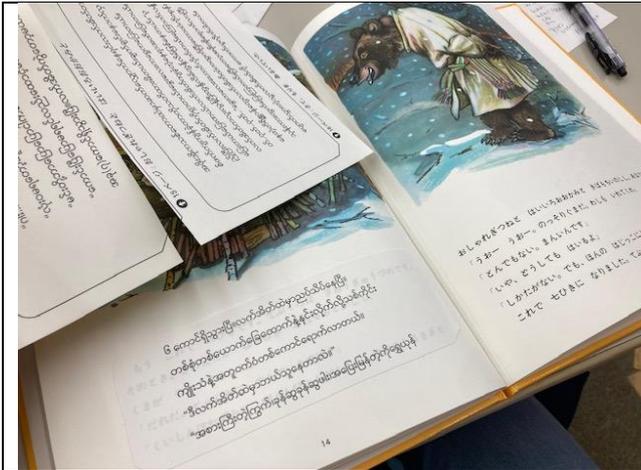
今回作業をした絵本は、翻訳した言語を使う難民キャンプや山間部などに、届けられます。来年の2月に船便で送られ、現地事務所を通じて、5月には現地図書館などに配られるそうです。関心がある方は以下のリンクから参照してください。



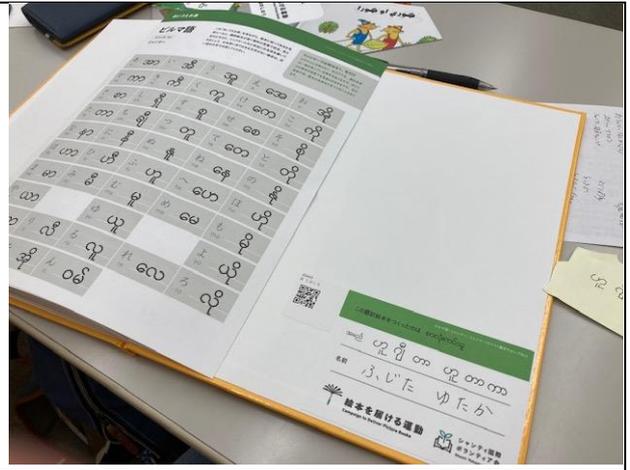
用意された絵本（右）に、ビルマ語に翻訳されているシール（左）を貼り付けます。文字の天地がわからなくなならないよう、切り抜くときは、上はまるく、下はななめ直線で切ります。書籍：『てぶくろ』絵：エウゲーニー・M・ラチョフ、訳：うちだ りさこ、福音館書店



中表紙のタイトルに翻訳したシールを貼り、作者などの翻訳部分を切っているところです。



作業を進めていきます。



作業をした人の名前をひらがなと、ビルマ語で書きます。初めての文字で、緊張します！



2冊目に入りました。  
書籍：『たいそうするよー1, 2, 3, はい！ー』作・装丁：高畠 純、光村教育図書



もくもくと貼り進めます。



ラオス語にて名前を書きました。○から書くとのことです。



今回、用意された絵本

<参考>

[絵本を届ける運動 | 公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会\(SVA\)](#)

[絵本は世界とつながる窓 | ミャンマー\(ビルマ\)難民キャンプ事業紹介](#)

